

令和 2 年 5 月 19 日現在

機関番号：52501

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18471

研究課題名(和文)発達障害者の道徳的責任に関する脳神経倫理学的研究

研究課題名(英文)A neuroethical study on the moral responsibility of pA neuroethical study on the moral responsibility of people with developmental disabilities

研究代表者

小谷 俊博(Kotani, Toshihiro)

木更津工業高等専門学校・人文学系・准教授

研究者番号：80708909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害者に対する道徳的責任を検討するために、脳神経科学の知見に基づく倫理的なアプローチの可能性としてどのようなものがありうるかを検討した。私たちが道徳的責任を理解し、追求することができるのは、どのような脳の機能によるのか。この問題のアプローチとして、特にポール・チャーチランドとパトリシア・チャーチランドの研究を主として検討した。その検討結果として、ボトムアップ型のモデル構築の必要性および無意識下の脳の働きをベースとした制御を中心とする道徳的主体の理解の必要性を明確化した。同時に、発達障害者の道徳的責任に関する報告を検討し、理解の段階と道徳的判断の実行の段階を分けたモデルの必要性を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達障害者の問題について、配慮の必要性が認識されると同時に、どのような理解や配慮が必要であるのか、という課題が生じている。本研究は、さまざまに想定される社会的状況の中でも、道徳的責任という観点から、この問題へのアプローチの方法を検討した。脳神経倫理学的研究から、無意識下での制御機能の重要性が指摘された。その機能を中核に据えた上で、発達障害者の認知機能の特異性を認識することで、どこまで道徳的責任が求められ、どこからが配慮の対象となるのか、さらなる客観的な基準の構築に向けた検討の道筋を明確化することが、本研究の社会的意義である。

研究成果の概要(英文)：In order to examine moral responsibility for people with developmental disabilities, I examined that what kind of approaches based on the findings of neuroscience could be taken. What function of a brain allows us to understand and pursue moral responsibilities? As an approach to these problems, I studied the work of Paul Churchland and Patricia Churchland. As a result of this study, I clarified the need for bottom-up model and for an understanding of the importance of the concept 'control' to explain moral responsibilities based on neuroethical approaches. At the same time, I reviewed reports on the moral responsibility of people with developmental disabilities. And I clarified the need for separating "understanding function" and "executive function" on moral responsibilities in order to build proper models on their moral responsibilities.

研究分野：倫理学

キーワード：発達障害 道徳的責任 チャーチランド

## 1. 研究開始当初の背景

障害者差別解消法により、発達障害者に対する公平性、人格尊重、権利保護等の問題が重要課題として認識されてきた社会的背景がある中で、筆者は脳機能についての知見をベースとした道徳的責任論を発表してきたが、このモデルは発達障害者の困難を理解することにも適用可能であると考えた。

研究開始当初に指摘されていたが、発達障害児・者の数は年々増加しており、平成 27 年度、特別な支援を受ける子どものうち、発達障害の子どもの数は、公立小学校で 35,095 名、公立中学校で 6,891 名であり、平成 19 年度（小学校 6,228 人、中学校 666 人）より総数で 6 倍以上増加していた。その状況を改善するためには、発達障害者と共存する社会を形成するために現在機能している道徳体系の改訂が不可欠であると考えた。

以上の背景、認識のもとに、本研究を開始した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、発達障害者を倫理的観点から捉え直すことで、発達障害者に対する包括的で適切な社会システムを提案することである。「障害者差別解消法」により「合理的配慮」が義務づけられた教育機関等は、発達障害者に対する配慮の具体的なあり方を模索している段階である。配慮の内容を決定するためには、各機関の経済的・人的資源も問題だが、公平性が保たれているか、人格が尊重されているか、権利は守られているかなど、道徳的な観点からの妥当性が確保されているかが重要な問題であり、道徳的な観点が不可欠である。社会生活の中で彼/彼女らの問題を理解し、道徳的地位を適切に提示することで、発達障害者を取り巻く状況を改善することが必要である。

そこで、本研究は、脳神経科学の知見を取り入れた脳神経倫理学によるアプローチから、発達障害者への適切な配慮とは何かを明らかにすることを目的とした。これらの研究を通して、発達障害者の抱える道徳的な困難を客観的に理解することが可能となると考えた。その結果として、(1) 発達障害者への道徳的評価の改善、(2) 発達障害者への適切な配慮を実現するための社会システムの構築、および(3) 特定分野において特別な才能を持つ発達障害者の教育プログラム構築のための基盤形成の実現が期待される。これらを最終的な目的に据えつつ、以下の3点を中間目的とした。

### 道徳的人格の標準モデル構築

P.M. チャーチランドが、空間表象をベースとした道徳的人格の脳神経科学的なモデルを提唱し、それをケイスピアと P.S. チャーチランドが「道徳状態空間 moral state-space」として再構築したものを、P.S. チャーチランドが制御下 (under-control) 概念に基づく構想として再提起した。この新たなモデルは、私たちの脳機能を参照することで、私たちが何を制御することができ、どのような傾向性に支配され、どのように行動・判断を下すのか、あるいは逆に、どのような行動・判断を下すことはできないのかを明らかにする。

### 発達障害者の道徳実践主体としての評価方法の研究

発達障害というカテゴリーには、自閉症スペクトラム障害多動・注意欠陥障害、学習障害が含まれ、それぞれに抱えている困難が異なる。本項目は、道徳的人格の標準モデルと発達障害者の諸症状ごとの人格モデル間にどのような差異が存在するのかを明らかにすることを目的とする。

### 発達障害者を包含する道徳的責任論の構築

人格に注目することで、行為について道徳的責任を帰属しようとする際に求めることができる範囲は確定することができる。本研究では、発達障害者を、道徳能力の欠如(ないしは特異性)のもとに理解した上で、彼ら/彼女らに求められうる道徳的責任は何かを明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

研究方法は主として文献研究となるが、随時、最新の知見を得るため、研究会等に参加し情報収集を行う。本研究では、さらに発達障害の支援に取り組む研究者へのインタビュー等も行った。

## 4. 研究成果

まず、2018 年 1 月に以下の論文を発表した。

・「発達障害の過剰診断について」『木更津工業高等専門学校紀要』51 号、2018 年 1 月、pp. 11-16

本論文では、主たる研究対象である発達障害について、その規定の曖昧さという問題、および

新たな基準による現場の困惑と対象の拡大という自体に直面し、その問題点を明らかにした。  
続いて、2019年には以下の論文を発表した。

・「ポール・チャーチランドの脳神経倫理的アプローチについて」『倫理学』35号、2019年3月、pp.103-117

本論文は、ポール・チャーチランドの研究を足がかりに、特に道德と社会性が連続したものかどうかについて、連続したものと捉える視点の優位性などを論じた。本論文は、研究課題全体に対して、研究の枠組みそのものを問う役割を果たしている。発達障害を含む精神障害者の道德的責任を検討する際に、道德という概念を極度に限定してしまうと、考慮対象から外してしまうことにつながりかねない。現実には生じている障害者への差別問題などを是正することは社会的な課題であり、この課題は、道德を捉え直すことを要請している。こうした要請のもとに道德という概念を考える際に重要なことは、道德という概念と社会性というより広範な概念の連続性を認めることである。自然主義的な構想のもとで、この連続性を積極的に主張する方法としては、進化心理学に依拠した進化倫理学を挙げることができるが、進化論のみでは、障害者の道德性を評価するための適切な枠組みを与えることはできない。

本研究成果は、今後の脳神経倫理的アプローチの1つの有力で具体的な方法を提供する意味で、一定の意義があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小谷俊博	4. 巻 35
2. 論文標題 ポール・チャーチランドの脳神経倫理的アプローチについて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倫理学	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小谷俊博	4. 巻 51
2. 論文標題 発達障害の過剰診断について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 木更津工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 11-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----